

Hokkaido - Alberta Dairy Science & Technique Exchange Association

Alberta News

アルバータだより

北海道アルバータ
酪農科学技術交流協会

No.

発行

2026.
01.01

115

目次 Contents

- | | |
|-----|------------------------------|
| 1 | 会長挨拶 |
| 2-3 | 海外農業技術セミナー |
| 4 | 佐藤貢・雪印乳業－酪農学園・
アルバータ大学奨学金 |
| 5-9 | 研修報告 |
| 10 | 定期総会・役員一覧・会費等 |



牛を引く高校生たちと 出会って思うこと

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

会長 高島 英也

(学校法人酪農学園 理事長)

昨年10月25日・26日、全日本ホルスタイン共進会（以下、「全共」）が北海道安平町にて開催されました。その開催に先立ち、前日10月24日に、北海道アルバータ酪農科学技術交流協会（以下、「北海道アルバータ協会」）は同じ会場にて、全国29の高等学校から集まった高校生たち約180名を対象に日本ホルスタイン登録協会との共催で「後継者育成プログラム」として、ジャッジング&リードマン・スクールとリードマン・コンテストを開催しました。

北海道アルバータ協会がカナダから招聘した、経験豊富なジャッジマンからのレクチャーを真剣な眼差しで聴く高校生たちの姿が、とても印象に残りました。またその後開催されたリードマン・コンテストには、82名の高校生がエントリーし、ジャッジマンによる厳しい視線に緊張しながらも、堂々と牛を引き、また巧みに牛を魅せる若者たちの姿がありました。

また、ハイスクール・デイルー・グランプリにおいては、高校から出品された牛の中から最高位の牛が選出され、北海道アルバータ酪農科学技術交流協会会長

賞を授与しました。見事グランプリを受賞した高校生たちの誇らしげな歓喜の笑顔は、前日のリードマン・コンテストでベストリードマンを受賞した高校生たちの笑顔と同様に忘れることができません。

5年に一度の全共の機会に、我々北海道アルバータ協会がこのような形で、これからの酪農を担う全国の高校生たちに、研鑽と遊びの場を提供することができたことに、これからの我が国における酪農発展のためのひとつのヒントを得た思いがしました。

1973年に設立された北海道アルバータ協会の活動は、これまで延べ500名を越える酪農家、教育研究者、留学生たちの交流を促進してきました。これまでの幾多の交流は、北海道とアルバータ州の相互の人的つながりを通じ、日本酪農の発展においてはもちろんのこと、北海道とアルバータ州、ならびに北海道とカナダ政府との国際交流にも大きな貢献をもたらしています。

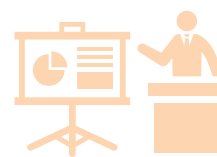
しかしながら、これまでと同じことを繰り返すだけでは、この人口急減のトレ

ンドの中では酪農界の未来はないと考えるべきでしょう。どうやって若者たちに酪農の魅力を伝えるかに関しても、北海道アルバータ協会は、「社会をも動かす大きな責任」の一翼を担っていることを改めて再確認したいと思っています。

北海道アルバータ協会設立の発起人である佐藤貢氏が、1994年に96歳にして、協会設立の理由を二つ、以下のように、我々に語って下さったことを昨年に引き続き引用いたします。

- (1)カナダの合理的な経営技術をぜひ体得し、日本酪農の国際競争力を高めてほしい。
- (2)若者に国際性豊かなグローバルな視野を持った人間に成長してほしい。

我々は、この北海道アルバータ協会設立の志を忘れてはなりません。昨年の全共の機会に得た若者たちの笑顔をひとつのヒントにして、これからどのように事業運営をしていくか、引き続き皆さんと知恵を出し合っていきたいと考えております。

海外
農業技術
セミナー全日本共進会で後継者育成
プログラムを実施しました

2025年10月24日から26日にかけて開催された第16回全日本ホルスタイン共進会北海道大会において、当協会では一般社団法人日本ホルスタイン登録協会様と共催で「後継者育成プログラム」を実施いたしました。本プログラムは2025年度海外農業技術セミナーを兼ねて実施されたものです。

【ジャudging&リードマンスクール】

共進会本大会前日の10月24日（金）午後には、全国の高校生を中心とした参加者を対象に「ジャudging&リードマンスクール」を開催しました。

講師にはカナダの公式審査員として30年以上の経験を持つブルース・ウッド氏をお招きし、牛の見方や牛の引き方について指導していただきました。このスクールには全国から178名の生徒が申し込み、熱心に耳を傾けていました。

英語で「リードマンとしての心得」は「Showmanship（ショーマンシップ）」

と呼ばれます。どのように牛を正しく見せ、審査員や牛に対してどのように振る舞うべきかを、実践的に学びました。

審査会場のリングでは、生徒達が輪になってメモを取り、講師や牛の動きを一生懸命に追いかける姿が印象的でした。参加者の中には中学生の姿もあり、真剣に学ぶ姿勢が会場全体に広がっていました。

【リードマンコンテスト】

スクールに続いて行われた「リードマンコンテスト」には82名の高校生が出場しました。

ブルース氏が実際に審査を行い、「高校1・2年生の部」「高校3年生の部」それぞれからベストリードマン、セカンドベストリードマン、優秀賞5名を選出しました。

講師の指導内容を実践しながらShowmanshipを発揮する高校生たちの姿からは、本大会にも劣らぬ熱気と緊張感が感じられました。予定時間を大幅に超える

審査となりましたが、ブルース氏は「全てのリードマン、全ての牛を見ることが私の務めであり、信念です」と語り、最後の1人・1頭に至るまで真剣に審査していました。

表彰では受賞者に対して主催者・関係者からトロフィーやメダルが贈られ、ブルース氏からも記念品が授与されました。

【初開催「ハイスchool・デイレ・グランプリ」で会長賞授与】

10月25日（土）・26日（日）に行われた共進会本大会では、出品された高校出品牛の中から最優秀牛を選出する「ハイスchool・デイレ・グランプリ」が初めて開催されました。当協会からは、優秀な成績を収めた高校に対し、高島会長より「会長賞」として楯を授与いたしました。

授賞式では、高島会長が出場した高校生一人ひとりに声をかけ、その努力と栄誉を讃えました。会長賞の楯には、未来の酪農を担う若い世代への賞賛と激励の思いが込められています。

全国から参加された皆さん、運営を支えてくださった皆さん、花摘み隊を務めていただいた酪農学園大学の学生さん達に心より感謝申し上げます。

仲間とともに大切に育ててきた牛と出場するまでの道のりには、学校での学習に加え、朝の搾乳や牛舎の清掃、日々の給餌など、数え切れない努力があったことと思います。その真摯な姿勢と情熱こそが、未来の酪農を支える大きな力になると信じています。

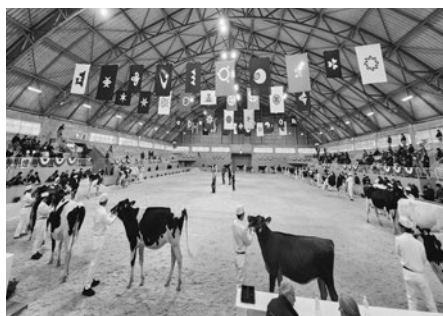
これからも「牛を観る目」と「牛と向き合う気持ち」を大切に、夢に向かって歩み続けてください。事務局一同、その夢の実現のために酪農学園で再びお手伝いできることを心から待ち望んでいます。

【実施後アンケート】

共進会終了後、後継者育成プログラム



ジャudging&リードマンスクールの様子



リードマンコンテストの様子



に参加された高校生へお礼状と会長メッセージをお送りしました。あわせて、今後さらに本プログラムを充実・発展させるため、29校へアンケートへの回答を依頼し、26件の回答を得ました。プログラム全体としては、約9割が「参考になっ

た」との回答で、今後聞いてみたい内容としては、回答の多い順に、「牛の見方について（ジャジング）」、「牛の引き方について（リードマン）」、「牛のエサについて」、「搾乳ロボットについて」との回答でした。寄せられた質問に対しては高校へ直接回

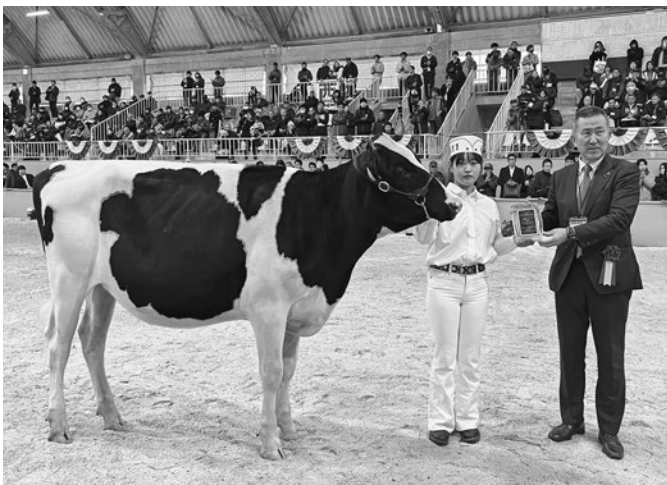
答し、「毛刈り講習会を実施してほしい」との要望については、次回プログラム開催を待たずに、何らかの形で実現できるよう検討を進めたいと考えています。本プログラムが、未来の酪農を担う若者の学びを支える一歩となれば幸いです。



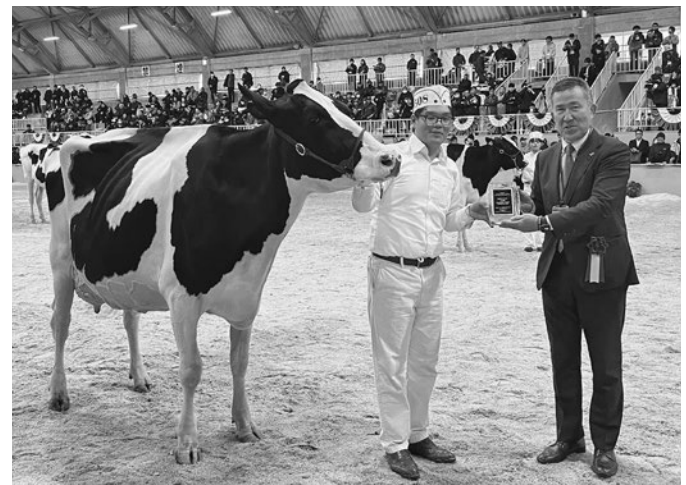
高校1・2年生の部ベストリードマン 森田柚さん（とわの森三愛高等学校）



高校3年生の部ベストリードマン 新居莉乃さん（帯広農業高等学校）
高校3年生の部セカンドベストリードマン 藤田梨愛さん（盛岡農業高等学校）



ハイスクール・デリー・グランプリ（未經産の部）
出品者：群馬県立吾妻中央高等学校



ハイスクール・デリー・グランプリ（経産の部）
出品者：京都府立農芸高等学校



群馬県立吾妻中央高等学校（左）、京都府立農芸高等学校（右）の皆さん



ご協力いただいた花摘み隊の皆さん（酪農学園大学・家畜生産改良学研究室）

佐藤貢・雪印乳業－酪農学園・ アルバータ大学奨学金



奨学金授与式・留学報告会

2025年7月8日(火)、酪農学園本館において開催された第53回理事会・定期総会に引き続き2025年度佐藤貢・雪印乳業－酪農学園・アルバータ大学奨学金授与式、及び2024年度留学報告会を行いました。

2025年度は、高校生留学サポートプログラムで1名、アルバータ大学夏季研修プログラムで3名、大学院留学サポートプログラムで1名、計5名の生徒・学生に奨学金を給付しました。当日参加した奨学生4名は、高島会長より奨学金証明書を受け取った後、留学への抱負を英語でスピーチし、力強い決意を述べました。

また、当日参加した2024年度奨学生の伏見琴音さん(アルバータ大学春季研修プログラム)、鳥淵一彩さん(海外農業研修サポートプログラム)からは、留学生活の様子や留学を通じて得た学びや気づきについて、写真を交えたスライドとともに報告されました。発表からは、充実した留学経験で視野が広がったことがひしひしと伝わってきました。

今年度は、この他、春休みにアルバータ大学春季研修プログラムで学生1名を派遣することが決定しています。奨学金授与式は、2月に行う予定です。



伏見琴音さん

鳥淵一彩さん

奨学金受給者

アルバータ大学 夏季研修プログラム	農 食 環 境 学 群 食 と 健 康 学 類	3年	ひおき もちか 日置 桃香 さん
	獣 医 学 群 医 学 類	1年	ふじい 藤井すみれ さん
	獣 医 学 群 医 学 類	4年	おくの ゆうま 奥野 友真 さん
大学院生留学サポート プログラム	大 学 院 学 酪 農 学 研 究 科 修 士	1年	くにしま りむ 國島 梨夢 さん
高校生留学サポート プログラム	酪 農 学 園 大 学 附 属 と わ の 森 三 愛 高 等 学 校 通 信 制 課 程	2年	やまだ 山田ひより さん
アルバータ大学 春季研修プログラム	獣 医 学 群 医 学 類	3年	ぬまた ゆめか 沼田 夢加 さん

カナダ留学プログラム報告会を実施しました

11月24日(火)、酪農学園大学C1号館において2025年度アルバータ協会奨学金受給者による留学報告会を行いました。この報告会は、初めての試みとして、当協会会長への帰国報告を在学学生にも公開する形で行いました。報告は、アルバータ大学夏季研修プログラムに参加した獣医学類4年・奥野友真さん、食と健康学類3年・日置桃香さん、大学院生留学サポートプログラムに参加した酪農学研究科 酪農学専攻修士課程1年・國島梨夢さんの順に行われ、留学したきっかけ、実

際の学校生活やホームステイの様子、留学で得たものや今後の目標など、写真や動画を交えて紹介されました。実際の留学報告書は、5～9ページ、または当協会ホームページをご覧ください。

参加者からは英語力を維持する方法について質問があり、報告者からはチャットGPTを利用して英語で会話したり、毎日声に出して英語を話すようにしていると回答されました。

報告を聞いた学生からは、留学体験が直接聞けて大変参考になったとの声も聞

かれました。当協会は、奨学金を通じてより多くの学生が留学に挑戦できるよう、今後も継続して支援してまいります。



アルバータ大学研修プログラム報告書

農食環境学群
食と健康学類 3年
ひ お き も も か
日置 桃香
〔2025年度 奨学生〕



私のカナダ留学

私は1か月間カナダへ短期留学し、アルバータ大学のプログラムに参加しました。私がこの留学を決意したきっかけは、人生経験として他国の文化を学び、自分の視野を広げたいと思ったからです。また、英語が苦手だったため、現地で実際に生活しながら学ぶことで自然な表現やコミュニケーション力を身につけたいとも考えました。異なる環境に身を置くことで、新しい価値観に触れ、自分自身を成長させたいという思いもありました。

アルバータ大学の授業では英語のみが使用され、日本語を話すことは禁止されていました。そのため、最初は先生の説明を理解するだけでも精一杯で、とても大変でした。特に授業中のスピードの速い会話や質問にすぐ反応できず、もどかしさを感じることもありました。しかし、毎日英語を聞き続けるうちに耳が慣れ、単語や表現を自然に理解できるようになりました。授業を通して「わからないことを恐れず質問すること」の大切さを学び、積極的に発言する姿勢も身につけることができました。

日本の大学とカナダの大学の授業の大きな違いは、授業中に飲食が許可されている点です。日本の大学では飲み物を口にすることは一般的に認められていますが、食べ物を食べることはマナーとして好ましくないとされています。一方カナダでは、眠気防止や集中力維持のために軽いスナックを食べながら授業を受けることが認められていました。初めは驚きましたが、学生たちは自由でリラックスした雰囲気の中で授業を受けることができ、その環境が学びやすさにつながっているように感じました。また、授業の進め方にも大きな違いがありました。日本では教員の講義を中心にノートを取る形式が一般的ですが、カナダの授業では

グループワークやペアワーク、プレゼンテーションが主流で、必ず何かを発表したりクラスメイトと意見を交換したりする時間が設けられているため、英語で自分の考えを表現する力が求められます。最初は英語で自分の考えを伝えることに苦労しましたが、練習を重ねるうちに少しずつ積極的に話せるようになり、大きな自信につながったと思います。

日本との違いは他にも多く、毎日新しい発見の連続でした。駅のホームに改札がないことや、交通機関はICカードを一度タッチすることで、一定時間内であればバスや電車を自由に乗り換えられる仕組みになっていたことは、日本ではあまり見られない制度でした。そして、バスを降りるときにはほとんどの乗客が運転手に「Thank you」と声をかけていたのも印象的でした。こうした日常の小さな場面からも公共マナーの違いを感じることができました。また、カナダの気候は空気が乾燥していて、湿気の多い日本に比べるととても過ごしやすく感じました。しかし、朝と夜の気温と昼間の気温差が非常に大きく、朝や夜は一桁台になる日もあれば、昼間は二十度前後まで上がる日もありました。私が滞在した1か月の中で一度だけオーロラを見られたのも思い出です。カナダの街中にはゴミ箱が多く設置されており、公共のマナーがしっかりしていることも街の清潔さや快適さに繋がっていると感じました。



オーロラ

私のホームステイ先はホストマザー1人の家庭で、同じプログラムに参加していた他大学のハウスメイトと3人で生活していました。ハウスメイトは英語が得意で、ホストマザーとよく会話をしていた

ましたが、私は英語が苦手だったため最初はあまり話せませんでした。初めは、ホストマザーに話しかけられても、ハウスメイトが通訳してくれることが多く、もどかしさを感じることもありました。そんな私に、ホストマザーは「これから毎日、今日あったことを3文で話してみよう。それが練習になるはずよ。」と提案してくれました。その言葉がとても嬉しく、それから毎日ホストマザーにその日の出来事を3文で話すようになりました。最初は言葉が出てこず苦戦しましたが、徐々にスラスラ話せるようになり、英語を話すことの楽しさを実感しました。また、ホストマザー以外とも英語での会話を必要とされる場面は多く、初めは緊張しました。ですが、カナダの人々は目が合うとほほえみかけてくれたり、お店に入ると必ず店員から「How are you?」と声をかけてくれたりしました。このようなことから、人とのつながりや、コミュニケーションの大切さを学ぶことができました。

そして、休日にはホストマザーがショッピングや公園に連れて行ってくれ、さまざまな体験をさせてくれました。また、ホストマザーはベトナム出身であったため、アジア系の料理を作ってくれることもあり、普段はカナダの料理とアジア系の料理の両方を楽しむことができました。どちらもとても美味しく、異なる文化の食を体験できたことは貴重な経験でした。ホームステイを通して、こうした経験を与えてくれたホストマザーには深く感謝しています。

また、ロッキー山脈への日帰り旅行にも参加しました。写真で見るとより美しく、透き通った湖と高くそびえる山々の風景は、日本ではなかなか見ることができないものでした。私が滞在していた1か月間は毎日天気が良く、この日も澄んだ青空の下で旅行を楽しむことができました。どこを見ても美しく、言葉では表せないほど感動し、自然の素晴らしさやカナダの広大さを実感しました。



ロッキー山脈への日帰り旅行（ハウスメイトと私）

獣医学群
獣医学類 1年
ふじい
藤井すみれ
〔2025年度 奨学生〕



はじめに

私は、2025年の8月31日から9月27日までの約1か月間、カナダのエドモントンにあるアルバータ大学の、Communication Skills for Global Citizenshipコースに参加しました。本報告書では、留学中の生活や学び、留学前に知っておきたかった点、そして私自身の経験に基づくカナダの印象について記します。渡航は初めてではなかったため、楽しみが大きかった一方で、ホームステイの経験がなかったため、滞在先でうまく生活できるか不安もありました。

プログラムについて

本プログラムは、複数の大学の1年生から院生まで様々な学部・学年の日本人学生で構成されており、そこにアルバータ大学の教員が1名担当としてつく形でした。

また、現地には留学生をサポートしてくださるスタッフの方がいて、レクリエーションの先導や、大学内で困ったことがある際に相談することができました。

日本からカナダへ

エドモントンへは、成田からバンクーバーを経由し、国内便でエドモントンへ向かいました。到着後、ホストファミリーの方々が到着ゲートで出迎えてくださいました。空港ではホストマザーとホストシスターのエリンが、空港の外ではすぐに車に乗れるようホストファザーが待っていてくださいました。

学校生活が始まるまで

到着翌日は休みだったため、お土産を

私はこの留学を通して、特にリスニング力が向上したと感じています。現地で毎日英語に触れる中で耳が慣れ、自然な会話の流れを理解できるようになりました。また、コミュニケーションの大切さを深く学びました。たとえ英語が苦手で言葉や単語が分からないときでも、「伝えたい」という気持ちがあれば相手が汲

渡したり、時差ぼけを調整したりしながらゆっくり休むことができました。また、通学ルートの確認や、通学に必要なICカードの取得にも時間を使いました。

1週間目

留学初日は友人がおらず不安でしたが、全員が集まるまでの待ち時間に友人ができました。偶然にも同じクラスで、その後も交流が続く大切な存在となりました。クラス分けの後、教室へ向かい、担当の先生の温かい雰囲気に緊張が和らいだことを覚えています。

アルバータ大学は非常に広く、キャンパス内を歩くこと自体が楽しい経験でした。学生たちの表情も明るく、活気に満ちていました。また、キャンパス内でビアガーデンが開催されているなど、日本ではあまり見ない自由な文化も印象的でした。初週は慣れないことが多く、1日を過ごすだけでも精一杯でした。

2週間目

クラスメイトと打ち解け、大学へ通う際の緊張も徐々に和らぎました。ホストファミリーとも落ち着いて話す時間が増え、英語を話すことにも慣れてきました。行動範囲が広がり、さまざまな活動を楽しめるようになりました。

ホストファミリーは、学校での出来事や生活についてよく気にかけてくださり、私がうまく伝えられない時も、最後まで丁寧に聞いてくださいました。自宅ではないにもかかわらず、自由にくつろげるよう配慮していただき、とても過ごしやすい環境でした。

ロッキーツアー

ロッキー山脈へのツアーは、留学中で最も印象に残った体験でした。日帰り3日間の2種類があり、多くの学生は3日間のツアーに参加していました。雄大

み取ってくれ、思いが通じることが何度もありました。この経験を通して、言語の壁を越えて人と関わることの大切さを実感しました。今後は、日本でも日々のコミュニケーションを大切に、淡々と過ごすのではなく、自分から行動して新しい発見を見つけていきたいと考えています。

な景色や湖でのカヌー、乗馬、日本では見られない街並みなど、貴重な体験ができました。ここで初めて、ビーバーのしっぽを模したスイーツ「ビーバーテイル」を食べました。



ルイーズ湖での1枚

3週間目

3週目はプレゼンテーションやグループディスカッションの授業が増え、課題に取り組む時間も長くなりました。英語は、留学当初と比べて格段に聞き取れるようになり、思ったことをそのまま英語で表現できる場面も増え、自分の成長を実感しました。

また、この週には念願のオーロラを見ることができ、忘れられない思い出となりました。オーロラは静止しているものだと思っていましたが、予想外に形が変わり続け、その動きに驚きました。

4週間目

日々が充実していたため、時間が過ぎるのが非常に早く感じられました。帰国が近づくにつれ、ホストファミリーやクラスメイトと別れることへの寂しさが増していきました。ホストマザーの手料理を食べられる日が少なくなっていくことも名残惜しく、帰国したくない気持ちが大きくなりました。

ホストファミリーとの生活

授業が早く終わる日は、エリンのスクールバスをホストグランマと一緒に待った

り、休日には動物園やオーロラ観賞のためのキャンプに連れて行っていただいたりと、充実した時間を過ごしました。

ホストファミリーはフィリピン出身であり、フィリピン料理を初めて食べる機会になりました。野菜と肉のバランスが良く、とても美味しくいただきました。ご飯が出る家庭だったため、お米が恋しくなることはありませんでした。猫が好きな私にとって、飼い猫のマフィンの存在は大きく、初めてのホームステイでも安心して過ごすことができた理由の一つです。

エリンが懐いてくれたことも嬉しく、妹がいない私にとって本当の妹のように感じられました。

最後に

留学全体を通して、「自分は何が好きで、なぜ今その道を選んだのか」を問われる場面が多く、自分自身について改めて考える機会となりました。その結果、将



エリン

来のビジョンが以前より明確になり、卒業までの励みとなりました。私はこれまでにドイツに住んでいたことがあり、その中で稀に差別的な場面を見たり、自分が受けたりすることもありました。しかし、カナダではそのような視線を感じることは一切なく、想像をはるかに超えるほど多様な国の人々が暮らしていました。

また、授業中や友人との会話では、文化や互いの違いを大切に、尊重する姿勢が幾度となく話題になりました。こう

した点は、私自身の過去の経験があったからこそ、国ごとの違いとして特に強く感じられた部分です。

また、留学前の準備の重要性も強く感じました。特にホームステイ先の情報入力では、希望やこだわりを正直に記入することが大切です。私は猫がいる家庭を希望していたため、送付する写真全てに猫を写し、追記欄にも明記しました。その結果、希望に合った家庭に滞在することができました。ホームステイ先の変更を希望された方もいたため、事前準備とホームステイ先との相性の重要性を実感しました。

留学中にお世話になったホストファミリー、国際交流課の皆様、そして支えてくれた家族をはじめ、関わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。

獣医学群
獣医学類 4年
おくの ゆうま
奥野 友真
[2025年度 奨学生]



私が今回アルバータ大学夏季研修に参加した理由は、将来獣医師として必要となる英語力と多文化理解を現地で身につけたいと考えたためです。獣医学の学びを進める中で、国内だけでは得られない価値観や考え方に触れることの必要性を強く感じるようになり、実際に海外に身を置くことで自分の視野を広げたいという思いが高まりました。海外での生活は初めてで不安もありましたが、その一歩を踏み出すことで大きく成長できると信じ、研修への参加を決めました。

私は2025年9月1日から4週間、アルバータ大学の「Communication Skills for Global Citizenship」プログラムに参加しました。プログラム開始直後はちょうど大学のウェルカムウィークと重なっており、ピアガーデン、ムービーナイト、キャンパスツアーなど、さまざまなイベントに参加することができました。ウェルカムウィークは新入生を歓迎するための一週間で、大学全体が新しい

仲間を迎えるための温かい雰囲気に満ちています。私たち研修生も新入生と同じように扱っていただき、積極的に声をかけてくれる学生も多く、初日からカナダのオープンでフレンドリーな文化を感じることができました。イベントを通じて仲良くなった学生とは、その後の授業やアクティビティでも自然に会話が生まれ、英語を使うことへの抵抗が徐々に薄れていきました。



ウェルカムウィークのピアガーデンで
たくさんの人と交流することができました。

授業は平日の午前8時30分から12時30分まで行われ、SDGs、多文化主義、食文化、環境問題など、幅広いテーマについ

て英語で議論する形式でした。日本語の使用は禁止され、ランダムにペアを組んでロールプレイを行ったり、4人1組で意見をまとめて発表したりと、主体的な発言が求められる授業内容でした。最初は自分の英語力に自信が持てず、発言することに緊張していましたが、クラスメイトや先生は私の話を遮らず、ゆっくりと聞き取ろうとしてくれました。その姿勢に励まされ、間違えても伝えようとする意欲が強くなり、授業後半には自分から積極的に発言できるようになりました。

午後のアクティビティでは、キャンパスツアーやエルクアイランド国立公園、ウエストマネジメント施設の見学、博物館見学など、授業で学んだ内容と関連する体験が多く、英語で学んだ知識を実際の場面と結びつけながら理解を深めることができました。特に印象深かったのは、ロッキー山脈ツアーです。ロッキー山脈の壮大な景色や澄み渡る湖を目の前にしたとき、自然の圧倒的な美しさに言葉を失いました。クラスメイトだけでなく、他学類や他大学から参加した学生ともこの旅行を通じて一気に仲が深まり、国籍や背景を超えた関係を築くことができたのは大きな収穫でした。



ロッキー山脈ツアーで行った山頂からの
バンフという街の景色です。

ホームステイ先は、夫婦と2人の子どもが暮らす4人家族で、ホストファミリーは音楽の先生をしていました。到着初日に「今日は空気がスモークイだから窓を閉めてね」と優しく伝えてくれたことが印象的で、日常の些細な場面でも相手の安全や快適さを気遣う文化を感じました。夕食は家族全員で食卓を囲み、学校での出来事や子どもたちの話題で盛り上がりました。私の英語がたつなくても、ホス

トマザーはゆっくり話してくれ、言い換えたり例えを使って説明してくれたり、理解できるまで丁寧に向き合ってくれました。その優しさに触れて、英語への不安が次第に薄らぎ、家族の一員のように安心して過ごすことができました。

カナダの生活で特に心に残ったのは、人々が日常的に「Thank you」や「I appreciate it」といった感謝の言葉を交わす文化です。どんな小さなことでも必ず感謝を伝える姿勢があり、言葉で相手に気持ちを伝えることの大切さを学びました。日本では当たり前だと思って口にしないような場面でも、カナダでは自然と感謝の言葉が飛び交います。相手を尊重する優しい言葉を交わす文化は、日々の生活を心地よいものにし、人間関係をより豊かにする力があると実感しました。この経験は、自分のコミュニケーションのあり方を見直す大きなきっかけとなりました。

今回の研修を通じて、英語力の向上とともに、多様な価値観に触れ、自分自身

の考え方が大きく広がりました。今後はさらに英語力を高め、将来は海外で臨床経験を積み、多文化社会の中で活躍できる獣医師になることを目指しています。アルバータ大学で過ごした4週間は、私にとってかけがえのない経験となりました。この機会を支えてくださったホストファミリー、大学の先生方、スタッフの皆様へ心より感謝申し上げます。



キャンパスの写真です。歴史ある校舎や最新の設備が至る所にあり、活気のある大学です。

大学院生留学サポートプログラム報告書

大学院・酪農学
研究科修士 1年

くにしま りむ
國島 梨夢
〔2025年度 奨学生〕



【概 要】

私は、カナダのサスカチュワン大学に、9月13日から10月26日までの約6週間、短期留学をしてまいりました。留学先は、大学院生留学サポートプログラムの検討中に同大学 動物・家禽科学部のDr. Gregory Penner の講演を聞く機会があり、直接ご相談したことがきっかけで決しました。

【大 学】

大学では乳牛管理に関する講義を受講し、哺育期から泌乳期に至る栄養管理や代謝、疾病など、酪農学を幅広く学ぶことができました。授業はすべて英語で行われたため、全て理解するには翻訳アプリが必要でしたが、自身のリスニング力を高める非常に良い機会となりました。

また、大学院生による実験や採材を複数見学し、大学外の大規模農場にも同行させていただくなど、現場での学びも得られました。

加えて、Dr. Penner の研究室では、乳牛の第四胃にコリンを注入する実験や、ルーメンプロテクトドコリン (RPC) の給与試験の観察に参加する機会がありました。日本で進めている研究ともつながる部分が多く、手技やデータの集め方、実験計画の発想など、新たな視点を得ることができました。実験はテンポが早く、専門用語も英語のため理解が追いつかないこともありましたが、研究室の皆さんが丁寧に説明してくださり、不安よりも学びの楽しさが勝った時間でした。さらに、採血による血中コリン濃度の経時的变化や子牛の摂餌量・成長指標のデータ解析補助にも携わり、実データに基づく考察の重要性を実感しました。これらの経験は、帰国後の論文作成や飼料設計へ直結させたいと考えています。



【生 活】

生活面では、大学からバスで約10分の家庭にホームステイしました。ご夫婦と3匹の犬と暮らす温かい環境で快適に過ごすことができ、特に動物好きの私にとっては大きな癒しとなりました。休日には、現地で一人暮らしをしているホストシスターに誘ってもらい、大学公式スポーツチーム「Huskies」の男子フットボールの試合を観戦する機会もありました。彼女とは年齢も近く、「いつか日本を訪れたい」と話しており、再会を楽しみにしています。

【纏め】

今回の留学では、研究・授業・生活のすべてにおいて新たな発見がありました。異なる環境で畜産を学ぶ学生・研究者と交流する中で、自身の研究を多角的に捉

える視点を得ることができました。英語で考えを伝える難しさや大切さも実感し、今後の大きな糧になると感じています。最後に、本留学の実施に際しご支援とご助言を賜りました皆様に心より感謝申し

上げます。この経験を活かし、広い視野で研究に取り組むとともに、将来は日本に来る海外の方々のサポートにも積極的に関わっていきたいと考えています。

高校生留学サポートプログラム報告書

酪農学園大学附属
とわの森三愛高等学校
通信制課程 2年

やまだ

山田ひより

〔2025年度 奨学生〕



私が今回高校生留学サポートプログラムに参加するきっかけになったのは、担任の先生の助言でした。先生が「このプログラムに興味はある？」と声をかけてくださった際、私はすぐに参加を希望し、応募を決めました。もともと英語が好きで、高校生のうちに留学するという夢を持っていたため、このプログラムはその夢を実現する大きな機会だと感じました。

今回のプログラムでは、カナダ・アルバータ州エドモントンに約2週間滞在し、語学研修を行いました。平日は午前8時半から12時半までアルバータ大学の語学学校で授業を受け、午後はアクティビティがありました。休日にはホストファミリーや友人と出かけたり、学校主催のカナディアンロッキーツアーに参加したりしました。

午前中の授業はすべて英語で行われたため、集中力を切らさないように意識しました。授業内では積極的に発言することを心掛け、その結果、先生に褒められることも多く、英語学習のモチベーションにもつながりました。授業内容は、環境問題やLGBTQ、カナダの多文化社会に関するディスカッション、グループワーク、ペアワークが中心でした。また、プレゼンテーションやロールプレイも多く、クラスの前で発表する経験は、海外の授業形式を実際に体験できる大変貴重な機会となりました。

午後のアクティビティでは、エドモントンの観光スポットを訪れました。具体的には、Fort Edmonton Parkでエドモントンの歴史を学び、Elk Island National Park



アクティビティで行ったFort Edmonton Park

ではバイソンを探し、Waste Management Centerではゴミの再利用について学びました。これらのアクティビティでも、新たな友人を作ることでもでき、とてもいい思い出になりました。

アクティビティが早く終了した日や自由時間には、友人と近くのスーパーマーケットやカフェに行ったり、学校内のティム・ホートンを訪れ、その日の宿題を協力して行うなどしました。

休日には、ホストファミリーとWest Edmonton Mallを訪れ、モール内を散策しました。

また、学校主催のカナディアンロッキーツアーでは、山までバスで4時間移動し、山を登り、綺麗な川や滝を見ることができました。

友人と川の目の前で昼ご飯を食べることができました。その他にも湖に行き、すごく楽しかったです。



みんなでお昼ご飯を食べた時の集合写真

このカナダにいた期間、予想外のトラブルも発生しました。初日は学校のWiFiに接続できない問題があり、2日目以降も授業で使用するドキュメントに書き込みできない状況が続くなど、困難もありました。しかし、そのたびに友人や先生のサポートを受け、乗り越えることができました。特に、帰国まで残り3日というところでエアカナダのストライキの可能性が生じ、便を変更し、予定していた便がキャンセルになるという大きな問題がありました。その結果、3日間の延泊が決まりましたが、ずっと行きたいと思っていたお店に行くことができ、すごく嬉しかったです。

このプログラムを通じて多くの出会いや学びがありました。1人でカナダに行き約2週間を過ごすことは想像以上に大変で楽しかったです。異国の地で新たに人間関係を構築する難しさ、近くに両親がいないという環境で生活する大変さを知ることができました。自分自身のリスニング力が上がったおかげで授業内容をより理解できるようになったと実感した時や、クラスの先生に褒められた時、友人から私の英語力について褒められた時や、現地の方と会話できた時など色々な場面で自分の英語力が上がったと実感した時は、すごく嬉しかったです。特に、毎日学校に通えるようになったということは自分にとって大きな発見でした。週5日間、毎日学校に行くことは2年振りだったので不安だったのですが、ちゃんと通うことができたのは、自分にとってものすごく自信になり、自分自身の成長を感じる良い機会になりました。なので通信制、全日制を問わず、留学に少しでも興味がある人には是非このプログラムに参加して欲しいと思います。

定期総会・役員一覧・会費等



第53回理事会・定期総会の開催

2025年7月8日（火）、酪農学園本館において第53回理事会および定期総会を開催いたしました。会の冒頭、当協会顧問の北海道農政部長・鈴木賢一様に代わり、北海道農政部次長・大浦正和様よりご挨拶をいただきました。その後、高島会長の進行で、すべての議案が滞りなく審議・承認されました。総会の中では、約50年前の実習先農場（カナダ）を再訪された加藤寛治さん（酪農研修生5期）からの報告もあり、会場は感慨深い雰囲気になりました。

理事会・定期総会に続いて、奨学金授与式および留学報告会を執り行いました（詳細は4ページ）。



役職	氏名	所属	備考
名誉会長	鈴木 直道	北海道	知事
顧問	鈴木 賢一	北海道	農政部長
会長	高島 英也	学校法人酪農学園	理事長
副会長	幸田 幸弘	株式会社丹波屋	代表取締役会長
	堂地 修	酪農学園大学	教授
常任理事	丸田 卓也	雪印種苗株式会社	代表取締役社長
	萩原 克郎	酪農学園大学社会連携センター	センター長
	安宅 一夫	酪農学園大学	名誉教授
	石川 和哉	酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校	校長
	岩野 英知	酪農学園大学	学長
	小川 健太	酪農学園大学社会連携センター	副センター長
	児玉 秀雄	一般社団法人ジェネティクス北海道	常務理事
	篠崎 繁実	日本酪農青年研究連盟	委員長
	征矢 真一	学校法人酪農学園	常務理事
	高橋 茂	酪農学園大学	元教授
	津田 知亮	雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所	所長
	村山 昭二	酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校	元校長
	山口 哲朗	北海道ホルスタイン農業協同組合	代表理事組合長
	吉中 厚裕	酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類	学類長
	古川 隆文	雪印種苗株式会社 管理本部	副本部長兼経理部長
監事	吉田 陽平	学校法人酪農学園	財務課長
	阿部 茂	酪農学園大学 農食環境学群 食と健康学類	学類長
参与	井坂 光宏	酪農学園大学 獣医学群 獣医学類	学類長
	越智 成東	雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所	北海道本部副部長
	小糸健太郎	酪農学園大学 農食環境学群	学群長
	野 英二	酪農学園大学同窓会校友会	会長
	林 英明	酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類	学類長
	日向 貴久	酪農学園大学 農食環境学群 循環農学類	学類長
	古川 豊紀	酪農学園大学短期大学部同窓会	会長
	山下 和人	酪農学園大学 獣医学群	学群長

議案内容

- 第1号議案 役員の選任について
- 第2号議案 2024年度事業報告
- 第3号議案 2024年度収支決算および監査報告
- 第4号議案 2025年度事業計画（案）
- 第5号議案 2025年度収支予算（案）
- 第6号議案 会則の一部改正について

会費（2025年12月1日現在）

誠にありがとうございます。
感謝をもってご報告申し上げます。（敬称略）

【団体会費】
12月5日付けで団体会費の納入依頼を発送させていただきました。ご納入賜りますようお願い申し上げます。

【個人会費】
相澤 親 / 青野 芳樹 / 五十嵐広司 / 泉澤 章彦
伊藤 智 / 梅岡 一博 / 小野 信次 / 加藤 寛治
加藤 源祐 / 金曾 英俊 / 佐々木二郎 / 宿田 成宏
高橋 志穂 / 田守 義博 / 千葉 喜好 / 長井 信之
永谷 芳晴
(以上17名・50音順)

2025年度の会費納入について

2025年度個人会費未納の方は、以下のいずれかの方法で納入にご協力ください。

- ▶ 年間会費：3,000円
- ▶ 郵便振替（郵便局の払込取扱票でお払い込みください）
口座番号：02780-9-23131
加入者名：北海道アルバータ酪農科学技術交流協会
- ▶ 銀行振込（以下の口座にお振込みください）
銀行名：北海道銀行 大麻支店
口座種類：普通
口座番号：0102575
加入者名：北海道アルバータ酪農科学技術交流協会
会長 高島英也

【おこやみ】 当協会前会長である谷山弘行氏（74）が2025年11月6日にご逝去されました。協会事務局一同、ご生前のご功績に深い感謝と尊敬の念をもって、謹んで哀悼の意を表します。

